

## 文化財に見る 秩父の祭 ～「川瀬祭」と「秩父夜祭」～

### 1 秩父神社と3つの祭り

武蔵国の成立以前は「知知夫国」と呼ばれていた秩父。第10代崇神天皇の御代に、初代国造を拝命した知知夫彦命が、祖神の八意思兼命を祀って創建した秩父神社は知知夫国の総鎮守として信仰され、「延喜式神名帳」にも掲載された関東屈指の古社である。中世以降は妙見大菩薩を合祀し、明治に神仏分離令が発令されるまで「妙見宮」として栄えた。

『武蔵野話』（齋藤鶴磯、文化12年：1815）には、秩父神社の祭りについて、次のような記載がある。

「・・・此秩父神祠に上世より二月三日に植田の神事あり、誠に其古風なる事殊勝なることどもなり。是を勤る者は藺田氏の配下なる祝（ねぎ）の役にて苗をおろすより苜取るまでの農業の事を執行ふ祭式にて埒もなき神事のやうなれども古風を失わずして今に年々執行ことなり。・・・

又六月十五日秩父神祠、妙見宮二祠の神輿洗ひとて荒川の濱（ほとり）に出て執行ふ神事あり。

又霜月朔日より六日まで毎日大宮の町に市立ちて上毛、下毛、信濃、尾張、江戸諸国の商人いり込みて売買す。其繁栄なること筆紙に述べがたし、三日の夜神輿および屋台など御旅所とて祠地より十町も南に小高き所へ引きあげんとして畑の中を踏通り挑灯をともしつれ、其群衆十町四方白昼のごとく実に譬んかたなし。小高き所へ屋台を引上、神輿を御旅所の地へ据置、其前にて躍を催し神事を執行ひて後皆祠地へ引返す事なり、誠に善つくし美をつくし、かかる神事も珍しというべし・・・」



武甲山と秩父盆地



秩父神社

## 2 文化財としての秩父祭

例年 12 月 3 日を中心に行われる「秩父夜祭」は秩父神社例大祭で、行事は重要無形民俗文化財、付祭の笠鉦・屋台は重要有形民俗文化財に指定されている。

### ○重要有形民俗文化財

「秩父祭笠鉦・屋台六基」(昭和 37 年 5 月 23 日指定)

※指定された時点では、「古い信仰上の習俗を伝えるもの」として「重要民俗資料」になり、その後の指定変更により現状となる。

※所有者：中近笠鉦保存委員会・下郷笠鉦保存会・宮地屋台保存会・上町屋台保存委員会・中町屋台保存会・本町会

### ○重要無形民俗文化財

「秩父祭の屋台行事と神楽」(昭和 54 年 2 月 3 日指定)

※保護団体：秩父祭保存委員会、公開日：12 月 2 日、3 日

※平成 28 年 12 月にユネスコ無形文化遺産に登録される。

### ○埼玉県指定無形民俗文化財

「秩父神社御田植祭」(平成 21 年 3 月 17 日指定)

※保護団体：秩父神社御田植祭保存会、公開日：4 月 4 日

### ○秩父市指定無形民俗文化財「川瀬祭の民俗行事」(昭和 57 年 9 月 10 日指定)

※保護団体：川瀬祭保存会、公開日：7 月 19 日、20 日

### ○秩父市指定有形民俗文化財「川瀬祭笠鉦・屋台 8 基」

(平成 20 年 3 月 25 日指定)

※所有者：番場町会・宮側町会・東町会・熊木町会・道生町会・上町会・中町会・本町会

注：教科書体は、笠鉦

## 3 秩父神社御田植祭

### (1) 信仰

旧暦 2 月 3 日の春祭り、「田植えマチ」といわれ、農事の実務の開始にあたって豊作を祈願する予祝儀礼である。「どうするマチ」という呼称もあったが、この時期は奉公の年季明けにあたったという。

古くは祭りの前に「妙見神事」と称し、旧暦正月 20 日から 2 月 3 日まで、秩父郡内すべての住人が仕事を休み、遊びを控え、物忌み精進に努めたという。

「春に山の神が里に下りて田の神となって稲作を守護し、秋の収穫が終わると再び山にもどる」という伝承は各地にみられるが、御田植祭は、武甲山の山の神の来臨と考えられる。現在は、4 月 4 日に行われる。

### (2) 祭りの流れ

#### ○準備

・種粃 前年の例大祭や新穀奉献感謝祭に奉納された初穂





御田植祭



参道入口に設置した水口と水麻

- ・祭場と龍の形をした水口の設置
- ・用具作り（水麻、鋤、馬、ササラ、馬鋤、苗、カッチキ、切り餅）

○当日

- ・祭典 御本殿の儀：宮司から水麻が禰宜へ、さらに作家老へと渡る。
- ・水乞い 今宮神社まで神幸行列、水分行事の後、  
再び行列が秩父神社へもどり、作家老は龍の形の水口の頭部に水麻を立てる。
- ・拝殿の神事 配膳：作家老は宮司宅、神部は拝殿で白米と煮豆を頂く。  
坪割：その年の作付目安を立てる。
- ・神楽
- ・御田植神事  
苗代づくり→本田の田植え→餅まき→後片付け→直会  
魔除け・予祝の鋤

4 川瀬祭

(1) 信仰

旧暦6月15日を中心に行われる祇園祭は、ちょうどそのころ疫病が活動を始めると考えられていた。昔から「おぎおん」とか「天王」あるいは「おかわせ」と呼ばれる川瀬祭は、7月23、24日に移行した時期もあったが、現在は従前どおり19、20日に行われる。

○祇園信仰

八坂社、牛頭天王→祇園会、津島天王社から関東各地に伝播した。

琵琶湖をはさみ、「西の祇園社、東の天王社」と呼ばれ、酷暑を前に悪疫退散を祈願する信仰である。

(2) 主な文献上の記録（浅見清一郎『秩父 祭と民間信仰』1970 有峰書店）

○「六月十五日の川瀬の祓」（「井上家文書」、万治2年：1659）

○「六月・・・十五日妙見川瀬祭ニ而・・・」（「松本家文書」、宝永6年）



- 「六月十五日秩父神祠妙見宮二祠の神輿洗ひとて荒川の濱に出て執行ふ神事あり・・・」(『武蔵野話』、文化12年刊)
- 「六月十五日神輿禊神事有テ西方荒川ノ水流中ニ神幸アリ、・・・」(『秩父志』、天保8年起稿)

(3) 付祭

○笠鉾、屋台

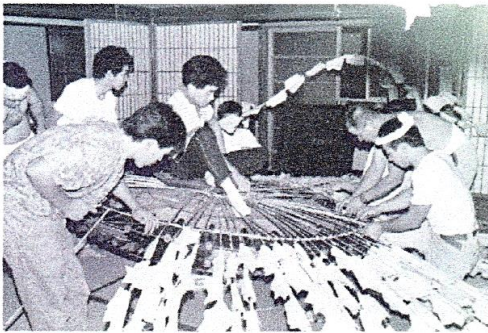
- ・明治17、8年に本町、同20年頃に中町、同22年に上町、宮側町、同27、8年に番場町、同30年代に東町が相次いで建造。
- ・昭和になって、東町、番場町、本町、宮側町が屋台を新造し、昭和28年以降に熊木町が笠鉾を出す。
- ・屋台の4町会、笠鉾の3町会に加え、平成元年からは道生町が笠鉾を出すようになり、現在に至る。

○笠鉾、屋台の運営は、若い衆の行事が執り行う。

ある町会では、役員は行事長(1人)、副行事長(2人)、会計(1人)、連絡員(丁目ごとに1人)で、総勢15人前後の組織である。

準備は祭りの2か月から始まり、花作り、揃いの浴衣の取りまとめや発注、子どもや保護者への説明会、お囃子の練習、他町との連絡調整などが主な用務である。

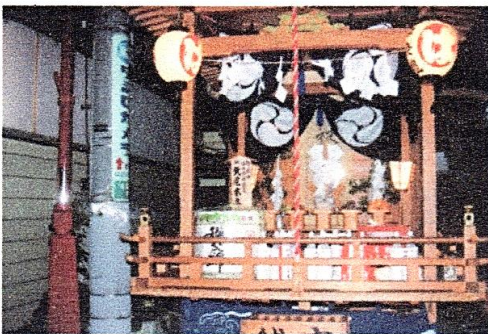
○川瀬祭に参加する子どもは、小学4年以上の男子で、これが「地域デビュー」になる。2年間拍子木を務め、6年生ではやし手を行って卒業す



笠鉾の花づくり



太鼓の練習



仮宮



笠鉾と屋台



る習わしだった。しかし、少子化によって従来の方法では維持できなくなり、女子の参加が認められるようになる。今はそれでも対応しきれず、参加を小学1年からとするなど、町会ごとで工夫している。

なお、上町・中町・本町の3町は、夏、冬ともに笠鉦・屋台を有し、川瀬祭（子ども）と秩父祭（おとな）が連動している。

#### （4）祭りの流れ

○各町会では八坂神社の仮宮を設け、「八坂神社」の掛軸をかけて御神酒や供物を奉納し、会所には「秩父神社」の掛軸をかける。

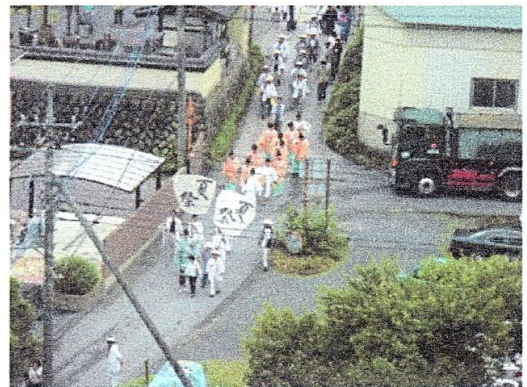
○7月19日は笠鉦・屋台が各町内を曳き回す。秩父神社では摂社の日御碕神社の御祭神、スサノヲ命を迎える「天王柱立て神事」が行われる。

夜半に若い衆行事が荒川の武の鼻川原で「お水取り」を行う。水は町内の辻や道路にまいて悪疫を流す。

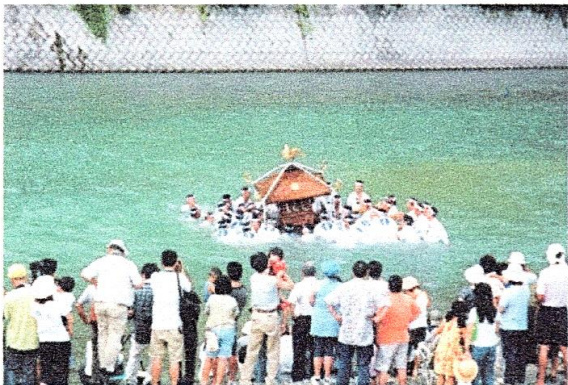
○20日は、昼前に各町内を曳き回した笠鉦と屋台が昼過ぎに秩父神社へ集まる。神社で「恒例悪疫除祈願祭」、「摂社日御碕宮例祭」の後、神幸行列が荒川に向かう。これに先立ち、屋台、笠鉦も出発する。荒川で神輿洗いが行われた後、「妙見淵」と呼ぶ川の濱で祭典が執行される。神輿が安置され、神楽奉納、祝詞が奏上され、終了後還御となる。



お水取りの水をまく



神幸行列



神輿洗い



祭典



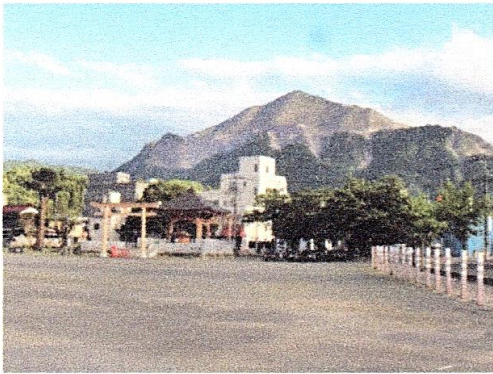
## 5 秩父祭

### (1) 御神幸にまつわる伝承

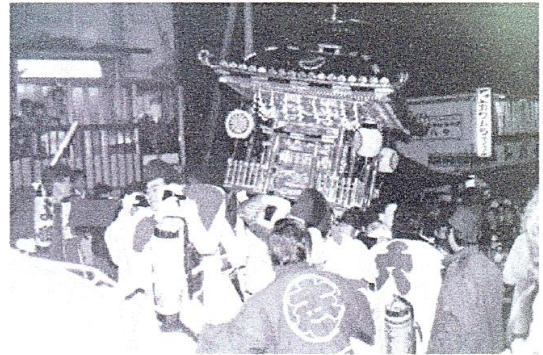
○女神の妙見さまと男神の武甲山さまがこの大祭日に御花畑の斎場で年に一度出会うという。万治二年九月、伊勢大神宮祠官荒木田成近が誌した井上家文書に「同社の巽の方に山あり秩父山と名く又は妙見山と名く此も社を妙見社といへるによりてなるべし山の形富士に似たり山上に神あり即秩父の神社同体の神なりともいへり又は夫婦の神ともいへりいづれに付大宮に属せる社なるにより祭の前宵大宮の神輿を出して山上の神をむかえ山上の神も大宮に來臨し給ふなりといへり或説に山を秩父山と号するにより山上の神誠の秩父の神にましまし陽神にして男体なり山下の神は陰神にして女体なり」とある。この俗説はこの時代から既に伝えられているのである。

○市内番場町には諏訪明神が祀られており、神幸道筋に当たるので妙見さまはこの神に気付かれないように神幸する。だから屋台笠鉾の供奉に際してはこの附近で一旦停止し、屋台囃子を休めるという。

○御神幸のおり、お手箱を持つ女性行列に加わるが、この中には妙見さまの化粧道具（榊の小枝）が入っているといわれ、願はたしをする者が捧持することになっている。（『秩父市誌』昭和37年、埼玉県秩父市）



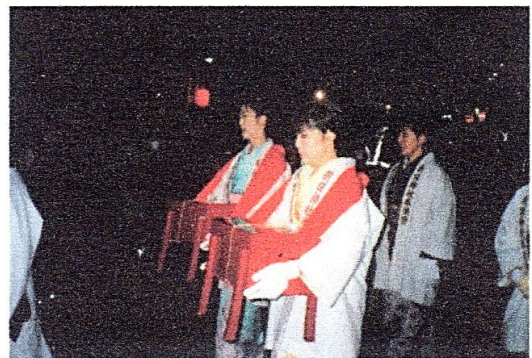
武甲山と御旅所



御旅所へ向かう神輿



諏訪社（番場町）



神幸行列



## (2) 祭り

秩父神社例大祭は、近世末までは旧暦 11 月 3 日を中心とする「霜月祭」に行われた。『秩父領百姓年中業覚』（宝永 6 年、松本家文書所収）には、「・・・（十月）廿より十一月三日迄妙見神事二月通り、・・・とあり、「二月通り」とは、「・・・（一月）廿日より二月三日まで妙見神事ニテ秩父郡之内竹木伐不申候普請鳴物等止田畑へ鋤入不仕候女は絹木綿之業相止メ申候男はくつはらし縄むしろ等仕度仕候」とある。これは、秩父郡全域の人々が生業や娯楽を控え、家の中で静かに過ごし、物忌み精進して身を清浄に保つ習わしである。

### ア 神事

秩父神社例大祭、現在の神事は、妙見菩薩が合祀された時点から。

### イ 付祭（つけまつり）

(ア) 笠鉾・屋台の供奉 ⇒近世中期から

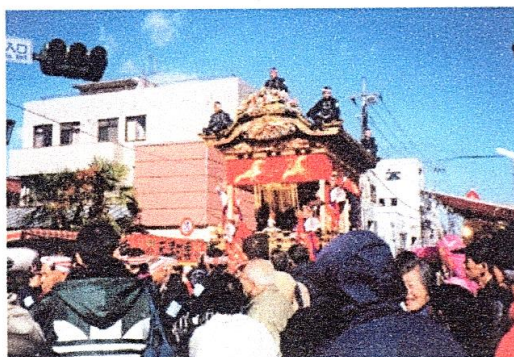
四方を山に囲まれ、水田耕作は限られた地域のみで、大半は山の傾斜地を耕して生活を支えてきた農家の人たちにとって、養蚕は貴重な収入源だった。江戸が元禄期に消費都市としてめざましい発展をとげ、絹織物の需要が高まったことが追い風になり、絹市が繁栄した。こうした収益により、笠鉾や屋台ができて、祭りはさらに盛り上がりを見せた。



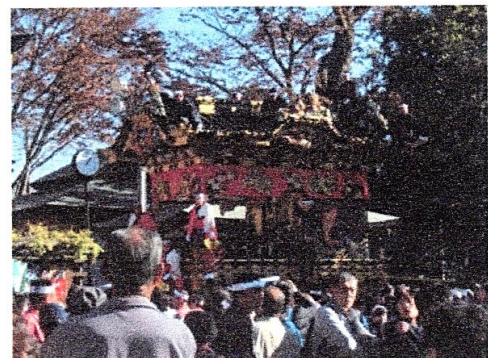
中近笠鉾（特別曳行、2012年）



下郷笠鉾（特別曳行、2012年）



宮地屋台



上町屋台





中町屋台



本町屋台

○笠鉾 (中近・下郷)

内室形式の屋台に標木を立て、笠鉾を取り付ける

- ・中近：屋型 (八棟造)、花笠 (三層)、笠の上 (万燈)、  
万燈の上 (雲形せき台)、せき台の上 (大しめ)
- ・下郷：屋型 (腰屋根付四方唐破風)、花笠 (三層)、笠の上 (万燈)、  
万燈の上 (雲形せき台)、せき台の上 (天道)

○屋台 (宮地・上町・中町・本町)

舞台形式の屋台で、襖の前方は舞台、後方は楽屋。いずれも張り出し舞台を設置し、現在は4年に一度の交代で「屋台芝居」を上演する。

- ・宮地：屋型 (前後唐破風造)、登勾欄なし
- ・上町：屋型 (四方唐破風造)、登勾欄あり
- ・中町：屋型 (前後唐破風造)、登勾欄あり
- ・本町：屋型 (前後唐破風造)、登勾欄なし

(イ) 笠鉾・屋台の曳行

○役柄

- ・行事：当年の町内祭事に関する責任者
- ・囃し手：4人一組、生涯に一度、いわば、付祭の花形
- ・拍子木：屋台の発進・停止を拍子木を打ち鳴らして合図する
- ・曳き子：100～150人 ・職人 曳行時における屋台の保全

○行程 (一例)

- ・祭奉仕への照会 (10月)：町内各戸へ
- ・屋台組立、会所設営 (11月末)
- ・曳行 (12月2日、3日)
- ・屋台解体、格納、会所撤収、直会 (12月4日頃)

(イ) 花火 ⇒明治30年代後半から

- 主催：秩父市煙火主催町⇒日野田町・野坂町・熊木町・宮側町・  
番場町・東町・上野町・道生町・桜木町・相生町・別所



○協賛有志：上寺尾・中寺尾・下寺尾・上蒔田・中蒔田・田村・大野原・黒谷・久那・太田・高篠・影森・浦山・横瀬

4 秩父祭の現況 (平成28年行事表から抜粋、加筆)

- ・祭事関係本部 (秩父神社社務所)
- ・秩父まつり対策本部 (秩父市観光課内)
- ・夜祭観光祭実行委員会 (一社 秩父観光協会秩父支部)

(1) 秩父神社 (妙見宮) 例大祭祭典

○12月1日

- ・御本殿御清浄の儀 (AM10:00)
- ・例大祭奉行祈願祭 (PM2:00)

○12月2日

- ・御神馬奉納の儀 (AM10:00)

※このときの馬の毛色で翌年の天候を占った。白毛ならば晴れが多く、栗毛は晴れ曇り、黒は雨、白毛・栗毛ならば順調、黒毛・栗毛ならば雨が多く、農家はこれを翌年の作付の目安にした。また、馬が荒れば世の中が騒がしく、おとなしければ泰平が続くと占う。

- ・新穀奉獻祭 (AM11:00)
- ・番場通り諏訪渡り (PM7:00)
- ・上町・中町・本町屋台 秩父神社境内曳据 (PM1:00~3:00)
- ・宮地屋台芝居上演 (於 宮地屋台芝居収蔵庫前)

※屋台芝居の上演は、宮地・上町・中町・本町が1年交代である。

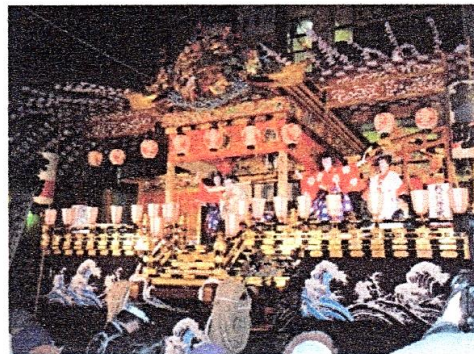
○12月3日

- ・献幣使参向例大祭祭典 (AM10:30)
- ・宮地屋台芝居上演 (於 秩父神社境内)
- ・御神幸祭 (PM5:30) 御神輿御進発 (PM6:15)

※高張・猿田彦命・榊神輿・祭旗・祭具・供物・神輿・神馬・神楽師・神主・氏子総代・大幣束



秩父神社に奉納された繭と新穀



屋台芝居





屋台と花火



御旅所



神神輿



会所で祭り終了のしめ

- ・中近・下郷・宮地・上町・中町・本町 笠鉾屋台進発奉曳 (PM6:45)
- ・煙火主催町スターメイン (競技) 点火 (PM8:30)
- ・御斎場祭 (お花畑お旅所に於て) (PM10:20)

※「亀の子石」に大幣束を立て、前方に供物、後方に神輿を安置する  
 ※祝詞奏上

※「代参宮」の神楽奉納

※祭典が終わると、屋台で曳き踊りが始まるが、ちょうどこのころ榊神輿に立てた榊の枝の奪い合いが始まる。これをいただいて神棚に供え春蚕の掃き立てに用いると、蚕が当たるといわれた。

春の御田植祭で鳥居の下へ立てた水神 (藁製の龍神さま) は、祭が終わると社殿に安置する。そして、例大祭でこれを榊神輿の基台に巻きつける。春に山から降臨した龍神を、収穫感謝とともに武甲山へお送りしようとするものである。

- ・終えて笠鉾・屋台帰還 (PM11:20) し、御神輿御還幸 (秩父神社へ)

- 12月4日 蚕糸祭 (AM11:00) ※蚕の豊作祈願。
- 12月5日 産業発展交通安全祈願祭 (AM11:00)
- 12月6日 新穀奉獻感謝祭併せて例大祭完遂奉告祭 (AM11:00)

(柳 正博)